

統一テスト化を通じた授業改善

～身に付けさせたい資質能力から授業を構想することによって担当者間の連携を活性化する～

横浜国立大学教職大学院 教育学研究科高度教職実践専攻
 神奈川県立大師高等学校
 本澤 勝也

1. はじめに

原籍校の国語科ではこれまで一部を除き、担当者ごとに異なる教材、進度、試験問題、評価方法で授業が行われてきた。これらは公平性の点からも問題ではあるが、互いの授業について共有したり、話し合ったりする機会がなかったということでもある。今年度より統一テスト化が決まり、授業や評価等について話し合いが活性化することも期待されたが、その機会はほとんどない。

また、原籍校では異動が激しく、臨任や再任用の職員も多いため、学習内容の系統性や連続性が担保されにくいという問題もある。総合学科から普通科へと改編した本年度だからこそ、担当者間の連携を通じた授業改善や、3年間を見据えた系統的なカリキュラムマネジメント作りの必要感が高まっており、絶好の好機であるといえる。

2. 研究目的

定期試験の目的は生徒が授業の内容をどれほど理解しているかを確認し、実践に生かすことである。それを統一化することは授業の内容あるいは目標を共通化することでもある。本研究の目的は統一テスト化すること自体ではなく、組織的な授業改善という大きな枠の中に統一テスト化をどう位置付けるか、を示すことにある。

3. 研究の対象・方法

原籍校の国語総合は1単位増の5単位であるため、現代文分野(3単位)と古典分野(2単位)とで、担当者を分け、全8クラスを延べ9人で担当している。そのため、それぞれの担当が一堂に会して話し合いをすることは難しい。そこで、夏季休業中に国語総合担当者を含む国語科全職員を対象に共同で授業案を構想する研修を実施し、その有用性を実感してもらった。その後、現代文分野、古典分野それぞれの取りまとめ役に単元計画の作成を依頼し、それを通してテスト問題だけでなく、共通の目標に向かって授業を行ってもらうこととした。研修方法や単元計画の作成に当たってはウィギンズとマクタイの「逆向き設計」を参照し、目標、評価、学習計画の順に検討をしてもらった。また、組織的

な授業改善を進めるに当たっては望月ら(2013)を参照し、「学習する組織」を援用し、チームでの授業設計・授業分析の在り方がどう変容していくか捉える。

4. 研究の評価

逆向き設計における「理解」とは単なる知識ではなく、学んだことを使える状態にあることを指し、「資質能力」ベースの授業づくりと重なる部分が多い。したがって、自然と「主体的・対話的で深い学び」の視点からの授業改善につながっていく。したがって、アクティブラーニングの視点で授業を評価することで、実践がどのように変わったかを捉えることが可能である。また、担当者や生徒へのアンケートやインタビューによって授業に対する意識の変容や、その要因を捉えたり、単元計画を作成し授業をする前後での試験問題の分析を行ったり、話し合いの機会や質を測ったりすることで、総合的に授業の設計や実施を分析したい。

5. スケジュール

月日	内容	備考
5/31	メンティの研究授業	高木先生を交えて研究協議
6/28	四谷小校内研究会	メンティと参加
8/9	国語科研修	共同で単元計画作成を体験
8/25	第2回研修会	AIについての研修
9月	学校実習	授業についてメンタリング
10/18～23	第3回定期テスト	実施予定
11月	第3回研修会	研究授業に向けて
〃	研究授業	1年次8クラス対象
12/11～14	第4回定期テスト	実施予定
3/2～7	第5回定期テスト	実施予定
春休み中	第4回研修会	次年度に向けて

6. 参考文献

- ・望月紫帆ら(2013)「チームで推進する授業研究の研究プログラムの開発事例」(日本教育工学会論文誌 37(1))
- ・G.Wiggins.,&J.McTighe.(2005). UNDERSTANDING by DESIGN. ASCD (Gウィンズ・Jマクタイ 西岡加名恵(訳)(2012). 理解をもたらすカリキュラム設計―「逆向き設計」の理論と方法 日本標準)